

「葡萄（えび）」は「葡萄（ぶどう）」の古名であり、黄泉国訪問神話では呪的な力をもつ「えびかづら」として葡萄の実が描かれます。一方で、平安文学でも多く「葡萄（えび）」の語を見るものの、いずれも果実のそれではなく、染め色の名もしくは襲（かさね）の色目として見えるものです。実態としてよく分からないところが多いのですが、それがどのように認識・意味づけられていたかについては検討の余地もあるでしょう。平安文学の諸例を通じて考察したいと思います。

## 2.8 (土)

津島昭宏  
「平安文学における「葡萄（えび）」」

「ぶどう」というキーワードを、図書館資料を整理する際に用いる日本十進分類法の各類にあてはめて見つける方法を、「発想ひまわり」という手法を用いて考えます。

## 2.15 (土)

秋山美和子  
「図書館で本を見つけたら発想法を「ぶどう」キーワードとし

季節感を重要視する俳諧におけるぶどうを、特に芭蕉の作品を中心に弟子の其角や蕪村、一茶などの作品にも言及し、江戸の俳諧でどのようにぶどうが詠まれいたかを歳時記などを踏まえて概観していきます。

## 2.22 (土)

塚越義幸  
「俳諧に見える「ぶどう」―芭蕉を中心に―



太宰治は「ゴルフパンツはいて、葡萄たべながら飛行機に乗っていると、恰好がいいだろうな」（「懶惰の歌留多」）といました。日本には古くから野葡萄が自生していましたが、明治時代になって西洋の葡萄が輸入されるようになりました。しかし、西洋の果物だからといって食べることに「格好」がつくのでしょうか？ 西洋の葡萄のイメージはワインと同様に翻訳本を通してそのイメージの大方が日本に輸入され、そこから葡萄に対する近代のイメージが形成されていったのでしょうか。本講座では、こうした葡萄のイメージの変遷について、西欧の翻訳本をはじめ、近代文学の中から辿ってみようと思います。

## 3.1 (土)

岩淵真未  
「西洋葡萄がもたらしたものの―

幕末期の江戸に突如現れた天狗小僧寅吉。国学者・平田篤胤は彼を引き取り、詳細な聞き取りを残しました。その中には天狗の食べ物話もあります。葡萄はどのように食べられたのでしょうか。天狗の歴史的変遷からお話します。

## 3.8 (土)

奈良場勝  
「天狗は何を食べるのか―天狗小僧寅吉の話―

酒の軍勢と餅の軍勢が合戦をする物語が、元禄頃に出た『酒餅論』以来、文芸の領域で数多く生まれ、餅酒合戦物と呼ばれるジャンルが形成されました。脇役ながら、葡萄酒も登場します。そもそも江戸時代の葡萄酒とはどのようなものだったのでしょうか。餅酒合戦物に登場する酒仲間たちとともに考えていきます。

## 3.15 (土)

伊藤慎吾  
「江戸の葡萄酒とその仲間たち―

